

河合奈保子、思い切りスツ転んだフックン、激しいパフォーマンスは2人の被害者を出した



河合奈保子、思い切りスツ転んだフックン、激しいパフォーマンスは2人の被害者を出した



TVを見ている立場ならいいとして、中継されても会場の空席は盛り上がりなかったらう。どっちにしても17分は長い



川口チヨフも、アセイシも、フジシユも、カイブさんも、

無言の抗議パフォーマンスが?

この年の紅白歌合戦は、レッシュ、紅白を標榜つまりここから若い視聴者に弾き始めるとなる。フジシユとどなったのは石川秀美、原田知世、C・C・Bの面々で、白組のトップスターを吉川豊司だ。

曲が「にくまれそうなるNEWフェイスだ」とも深読みできるが、登場した吉川はいまなりシャンパンを盛大にぶちまけるパフォーマンスを展開。副歌は事前NHK側から「ステーションはギターとヘイスの2人以外出さないで欲しい」と通達されていくとされるが、吉川はその申し出を完全無視して大暴走。段取りとおりに紅組のトップスター河合奈保

吉川暴走事件

1985年(第36回)

子ガステジに向かだが、曲が終わる。河合の曲デビューのイントロが流れても吉川の暴走は止まず。持っていたギターに火をつけて掲げるというラッシュを演じ、入。最後、吉川はギターをテリジに叩きつけて退いた。残念ながらこの部分はカットされたが、吉川の暴走ぶりは、ステージ上を目を見張る河合奈保子の様子からも十分に取れます。

スタンプが買えたオンスレジ

民放の「紅白包囲網」が強まる中、出演者確保のためにNHKが選んだ演出は「中継」だ。この年の紅白の目玉だったのは第一部のトリを務める長渕剛の初出場。対する紅組はシャイマンを演じるを言わず海外からシンデー・ローパーをフッキングした(驚縮)のことで着物で登場。続編を果たしたドイツのベルリンからの中継で登場した長渕だ。だが、開口一番、「NHKスタッフはクビはつかうか。やなななやなやな」と発カマシ(朝知らず)(未発表曲)「つかの少年」脱帽「を立続け17分に及んだ。

長渕電波ジャック事件

1990年(第41回)

これによつてスケジュールは押しに押すこととなり、その後の楽曲が2コーラスから1コーラスに短縮。途中に入る予定だった素人応援団の脱力パフォーマンスもカットされ、大トリの森進まで歌唱時間をカットされることになった。この長渕電波ジャックは出演者のみならず、NHK上層部の逆鱗に触れ、長渕はNHK出入り禁止となったという。長渕はその後、03年の第35回紅白歌合戦に13年ぶりに出場。インビュでよかった。「正直、あれはあれでよかったんだ。あのころのボクは今、思ってた以上に生々意な気がした」と語った。本番で歌ったのは、しあわせになろうよ、一曲のみだった。

大暴走なガブリチがマイクを離さない!!

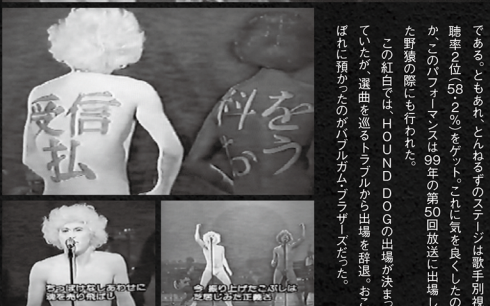
シャンパンをぶちまけギターを燃やす!

とんねるずパンツ1丁事件

1991年(第42回)



脱けはウケるといふ時代は終わった。パブルを愛したけなるとした91年放送の話は初出場組の多さ。X、S、M、A、P、パブルガム、フレーザー、K、A、N、森口博之、西田ひかる、永井真理子、M、I、K、E、白根、一発屋の皆さんがキラキラ、当時ミュージカル女優として世界的に活躍していたアラ・ライオン、そして、御所アンブレ、ウイリアムスなど、まさにパブリーナイト化したのだ。そんな中、かねてから紅白出場を公言していたとんねるずが、博之を連れて出場が決定。第二部の足袋という出で立ちで、石橋貴明が白、木梨憲武が赤に赤トヘイト、そして最後の人が背を向けると、背には「愛信料を払う」というセリフが……とまあ、これがまた時代がブルカとラッシュに……に尽きるわけだが、後に全裸パフォーマンスで大目玉を喰らったDJ、J、O、Z、M、A、はもと変わらぬいや、サブライト感ではDJ、J、O、Z、M、Aの方が明らかに上であるともあれ、とんねるずのステージは歌手別視聴率2位58.2%をゲット。これに気を良くしたのか、このパフォーマンスは99年の第50回放送に出場した野猿の際にも行われた。



バブルのノリなんてこんなもんですよ!

おそく、昨今のお茶アールの流れを汲み、若者には、何れも白のから分けがなないやう

おそく、昨今のお茶アールの流れを汲み、若者には、何れも白のから分けがなないやう